

令和7年度

一般選抜（I期）問題

試験日 1月31日

国語

試験開始までに下記の注意事項をよく読んでください。

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- ② 開始の合図後、解答用紙に「氏名」、「個人番号」を記入すること。
- ③ 受験票、筆記用具以外は、机の上に置かないこと。
- ④ 受験票は机の上に貼付してある「個人番号」の手前に置くこと。
- ⑤ 記述解答で、字数の指定がある問題では句読点は1字として数えること。
- ⑥ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- ⑦ 試験中は退席しないこと。（気分が悪くなった場合は、手を挙げて監督者に知らせること）
- ⑧ 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

〔一〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

日本語の歴史を辿つてくると、現代の私たちは、過去の人々の大変な努力を知らずに享受していたことに気づいたと思います。最もすばらしい過去からの贈り物は、日本語の文章です。漢字かな交じり文を採用し、言文一致を完成させてあるのです。

平安時代にさまざまの文章をこころみ、そのなかで最も優れている漢字かな交じり文を明治時代に採用し、現在に至っています。私たち現代人は、漢字かな交じり文を当たり前のようには書いていますが、過去の人々の英知のタマモノなのです。こんな特色があります。語と語との間を切らずに書けることです。ちょっと、英語を思い出してください。

My father is ill in bed.

語と語の間には、必ず空白が入ります。これを日本語の漢字かな交じり文で書いてみます。「父は病気で寝ている。」となつて、語と語の間には空白が入りません。世界で最も体系的に作られているハンゲルも、世界で最も簡素な文字体系のローマ字も、イスラム文化圏で通用しているアラビア文字も、すべて文章を書く時には、語と語の間に空白を入れて書く必要があります。同じ種類の文字が続くために、語の切れ目が分かりにくいからです。それに対して、漢字かな交じり文は、異種類の文字で構成されるために、切れ目を入れなくても、一目瞭然。さらに、句読点を併用すれば、わかりやすいことこの上なしです。

そのうえ、⁽¹⁾書くべき文章は、話し言葉と一致させてある。話し言葉と書き言葉が違っていると、書くために必要な語や言い回しを別に学ばなければなりませんから、文章を書くことのできる人間が今よりも少なくなつていたはずで
す。そして、何よりも、書き言葉が話し言葉と違っていると、自分の思いをストレートに表現することができない。

思った通りに話し言葉で書けるということは、血の通った文章ができるということなのです。話す言葉を存分に使える文章で、世界のケツサクの**(b)**一つ『源氏物語』が書かれていることを思い出してください。話す言葉で文章が書けるということが、優れた文学作品の誕生にいかに関係が深くかわっているかが分かります。

それに対して、文字と語彙に関しては、問題があります。日本人は、日本語をとにもかくにも文字で書き表そうとして、お隣の文化国家である中国から漢字を借り入れてきました。漢字を借り入れたことによって、日本語は豊かになったと同時に、煩雑さも背負い込みました。

豊富な証拠は、微妙な意味の差を漢字で書き表せることです。「なく」という語を漢字で書こうとする時、「泣く」「啼く」「鳴く」のどれを使うかによって、細かな意味の違いを表せるのです。「あう」も、「合う」「会う」「逢う」「遭う」「会う」のどれを選ぶかによって、ニュアンスの違いを出せます。

こんな潤沢さを享受できるのですが、一方では、かなりの知識人でも漢字が読めないという事態が起こっています。そもそも、漢字一字に多くの読みを与えています。

「行」という漢字を例にして見ます。まずは、「行者」に見るような「ギョウ」という音を中国から受け入れました。この漢字に当たる訓読みとして、最初は「ゆく」「あるく」「さる」「にぐ」「めぐる」「つらぬ」「おこなう」「つとむ」「あやまる」「はなつ」「わざ」「しわざ」などのたくさんの読みを与えています。中国語では、一単語の役割を果たしている「行」の字に対する訓読みとして、どれも可能なのです。平安時代末期の辞書『類聚名義抄』るいじゆみぎしやうには、もっと多くの訓読みがあげられています。そもそも、中国語にぴったりと意味の一致した日本語など、存在する方がまれです。訓読みが近い日本語をあてていくのですから、何種類もの訓読みが出来てしまいます。さすがにこれほど多数の訓読みができるのは不便ですから、この後整理されて、現在では、「おこなう」「ゆく」「いく」になっています。それでも、

三種類はあります。

さて、音の方も問題です。「ギョウ」の音のほかに、奈良時代から平安時代にかけて、中国から、「孝行」などの語に

見る「コウ」という音が入ってきました。日本人は、それも受け入れました。さらに、鎌倉時代になると、Aなどの語に見る「アン」の音も受け入れたのです。つまり、「行」には、「ギョウ」「コウ」「アン」の三種類の音がある。こうして、音読みと訓読みをあわせると、現在でも、六種類の読み方が「行」一字について存在しているのですね。

文字の問題と並んで語彙も、豊かであるという長所とその反面多すぎて困るという問題を抱え込んで現在に至ります。日本語には、日本民族のもとも使っていた和語があります。さらに、江戸時代まで影響を受けつづけた中国からの漢語があります。そのうえ、室町時代末期から入り始めた外来語があります。

これらに加えて、明治時代に西洋文明を取り入れるために日本人が作り出した大量の漢語が加わりました。最近では、欧米から多量の外来語が流れ込んできています。ですから、日本語では一つのことを言うのに、少なくとも、三系統の言い方があることも珍しくありません。たとえば、「やどや」「旅館」「ホテル」。少しずつ意味合いが違っていきますよね。こんなふうには、一つのことを言うのに、三系統の言い方があるというのは、語彙が潤沢な証拠です。

でも、その反面、こんな問題も起きてきます。たとえば、漢語を造りすぎてBがたくさん出来てしまったのです。耳で聞いただけでは分からないことが多い。「こうえん」と聞くと、あなたはどんな漢字を思い浮かべますか？「先生は日曜日にはコウエンに出かける」と言われると、先生と呼ばれる人はさまざまなジャンルにいますから、「講演」「公演」「口演」「公園」の四種類がコウホになってしまいます。

これからの社会は、あらゆる人がメディアを通じて話し言葉で説明していく機会が増えていく時代です。話した言葉を機械に聞き取らせて、そのまま書物にすることも増えてきています。話し言葉が主役になる時代の到来を考えると、Bの整理は急務です。

また、近年増えつつづけている外来語をどうするかという問題もあります。国立国語研究所が、こんな調査をしました。今から六十八年前（一九五六年）には、外来語が日本語に占める割合は、一割未満であったのに、三十年前

(一九九四年)には、外来語が日本語の三割強を占めるにいたったというのです。外国語をカタカナ書きしただけで、外来語になりきっていないものも多いので、カタカナ語と呼ぶこともありつます。つまり、カタカナ語の氾濫です。

三十年前といえ、国際化、グローバル化が叫ばれていた頃です。インターネットのフキユウも目覚しく、カタカナ語は増加のイットを辿っています。明治時代の新漢語ブームで、漢語が著しく増えたのに似ています。そして、意味も分からずに新しさゆえに使ってみるという傾向も似ています。ころみに、次に四つのカタカナ語をあげてみます。

アイデンティティー

イノベーション

エンパワーメント

モラルハザード

どれも聞いたことはありません。でも、意味が正確にとらえられているかと言われると、おぼつかない。こうした状況に危機感をおぼえた国立国語研究所は、意味の分かる従来語での「言い換え案」を提案しています。それによりますと、順次、「自己認識」「技術革新」「能力開花」「C」となります。たしかに、カタカナ語よりはるかに意味が分かります。

さて、これらのカタカナ語の扱いをどうしたらいいのでしょうか？ 分かりやすさの点から言えば、従来語で言い換えた方が数段優れています。でも、問題があるのです。言い換え案をみてください。ほとんど漢語です。ただでさえ多い漢語をふたたび増やし、同音異義語の問題を大きくしてしまうのはどうでしょうか。⁽³⁾耳で聞いただけではよく理解しなければならぬ場面が増えていく社会になることを考えると、問題なのです。

明治時代の西洋語を漢語に翻訳して受け入れていったのは、中国文化の浸透していた時代にマッチした方法でした。でも、現在多くの日本人に浸透しているのはアメリカ文化です。もはや、漢語の翻訳が力を失いつつある時代なのです。だとすると、カタカナ語のまま、意味の定着するのを待って使っていくという方法も、意外に良いと思えます。必要なカタカナ語は、時代の波に洗われてどんどん消えていきます。必要なカタカナ語だけを意味をはっきりさせなが

ら定着させていくのです。

(山口仲美『日本語の歴史』による)

問1 傍線部(a)～(e)の片仮名を漢字に直しなさい。

問2 空欄 A に当てはまる言葉を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 行先 イ 行路 ウ 行脚 エ 行商 オ 行方

問3 空欄 B に当てはまる言葉を、本文中から抜き出して答えなさい。

問4 空欄 C に当てはまる言葉を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 倫理遵守 イ 倫理崩壊 ウ 倫理意識 エ 倫理違反 オ 倫理規定

問5 傍線部(1)「書くべき文章は、話し言葉と一致させてある」とあるが、このことを別の言葉で端的に表現している箇所を、本文中から抜き出して答えなさい。

問6 傍線部(2)「日本語は豊かになったと同時に、煩雑さも背負い込みました」とあるが、ここでの日本語の「豊かさ」と「煩雑さ」とはどのようなことか。解答欄の形式に合うよう、本文中の言葉を抜き出し、それぞれ二十字以内で答えなさい。

問7 傍線部(3)「耳で聞いただけですばやく理解しなければならぬ場面が増えていく社会になる」とあるが、筆者がそのように考えているのはなぜか。本文中の言葉を使って、五十字以内で答えなさい。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

作中に手紙を多用した作家としては、やはり漱石を挙げなければならない。『A』(明39)以下の作中書簡は、鉄道や電車と並んで、彼がいかに「交通」に意を用いたかを示す証跡である。『A』では、「手紙をかくのが大嫌だ」という中学教師の「おれ」が清に宛てて四国から着任の手紙を書く。「奮発して長いを書いてやった」と言うわりには、二百字にも足りない短文だが、事実の羅列の中に「清が笹鮎を笹ごと食ふ夢を見た」の一文があり、短気でお世辞を言えない彼の、清を思う心がそれなりに表われた手紙である。清の返事は下書と清書で六日もかかった、冒頭だけでも四尺(約一メートル二十センチ)ある長い手紙だという。

『三四郎』(明41)では母からの手紙がたびたび来るが、清の手紙と同じく直接の引用ではない。くどくどと心配を練りかえすのも同様である。三四郎の返書にも特色はない。『三四郎』の中で特殊なものは美禰子の絵葉書だろう。菊人形見物の体験を踏まえて、小川のほとりに羊を二匹寝かせ、向こう側に獯猛な顔をした男、「デビル」が立つ図柄である。絵葉書は万国郵便連合加盟二十五周年を記念して官製で発行され、私製絵葉書も流行した。漱石もさかんに絵葉書を書いた。

ここで三四郎と美禰子の関係に深入りするつもりはないが、三四郎が「迷へる子」のサインを、自分と彼女を同類項に括る言葉であると満足したのは、彼女の心の深層を理解しているとは思われない。たしかに表面上では、この図柄は菊人形見物の一行から離れてしまった二人を表わし、休んでいた二人を睨んで去った男をデビルに見立てたものに違くない。だが美禰子が「迷へる子」と繰り返えしたとき、彼女は最後の一匹まで見捨てずに探しにくる大きな「愛」の心に期待し、かつそれが現われないことも確信していたはずだ。その「神」が野々宮さんであるかどうかはともかく、以後の三四郎はこの「誤読」を引きずって、美禰子への思いをつのらせていくのである。美禰子はやがて佐々木与次郎が

使いこんだ三四郎の金を用立ててくれるが、それに対して三四郎が書いた「湯気の立つた」ような礼状には、予期に反して返事もよこさない。ここでの手紙は、三四郎を迷わせたり思いこませたり、むしろ期待を裏切る機能によって小説を動かして行く。

『それから』（明42）の代助は、冒頭から二つの手紙に接する。一つは旧友・平岡の着京の通知、もう一つは父からの、帰京通知かたがた、一度顔を出せという指令である。大学を出てからも職に就くわけでもなく、実業家の父の仕送りで一軒の家を構え、優雅な趣味に生きてきた彼の世界は、それらによって波立ちはじめ、やがてひび割れて行く。平岡との再会は必然的にその妻の三千代との再会でもあり、父の用事が例によって「有為の人たれ」というお説教であることにはウンザリする。

周知のように、以後の展開は、代助が三千代への動かぬ愛に従って生きようと決め、三千代に愛を打ちあけた上で、父が勧める令嬢との縁談を断る。怒った父は、もう援助しないと申し渡すが、代助はひるまず、平岡に会って三千代を貰い受けようと考え、彼に手紙を書く。内容は、ただ内々に会って話したいことがある、という簡単なものだが、代助はそれを封書とし、宛先も平岡の会社とした。彼はその「運命の使」^(b)を書生に投函させた後、「茫然として自失した」⁽²⁾。将来に何の目算もなく、運命の歯車は廻り出した。

しかし何日経っても返事はなく、手紙がはたして平岡の手に渡ったのかどうかも疑い出した彼は、ついに書生に命じて、平岡に自分の手紙を読んだか否か、事情を確かめさせることになる。郵便が確実に相手に届くわけではないという不安が浮上したのである。すくなくとも代助の心の中では、手紙は五日間浮遊していた。

だが会見の結果、平岡は予期せぬ行動に出た。彼は三千代が重病であることを告げ、その一方で代助の父に手紙を出し、事^(c)の顛末を報告した。代助が甘い考えで信じていた「友情」^(d)は、破棄されたのである。激怒した父は代助との縁を切り、代助は職探しに飛び出さざるを得ない。

漱石の作中でもっとも有名な手紙は、多分『B』（大3）の半ばを占める、「先生」の長文の遺書である。その前作『行人』（大1―2）も一郎の精神状態に関して、友人Hさんが二郎に宛てた手紙で終るが、長編小説の最後を手紙で締めくくることが効果はどこにあるのだろうか。

『B』の「先生」は青年の「私」に遺書を残して自殺する。最初、「先生」は故郷に帰っている青年を呼び寄せ、青年の希望どおり、「私の過去を貴方のために物語」るつもりだった。だが青年の父が重病だったため、直接に語ることを断念し、長い手紙を書くという設定になっている。直接の対話が、現在残された遺書ほど整然と語れない以上、これはあらかじめ考え抜かれた設定だった。念のため、『B』のサブタイトルは「先生の遺書」だった。だいたい、これほど複雑な心理の劇を直接に語ることはほとんど不可能に近い。これは文字を通じて繰り返かえし読まれることによって、そのたびに新しい発見が生じ、同時に疑問も発生する類いの手紙なのである。

この遺書も手紙の特性上、「先生」の一方的な見解であることを免れない。「先生」にKがなぜ自殺したのかがよくは分らないのと同様に、最初の読者たる青年にも、現在の読者である私たちにも、「先生」がなぜ自殺したのかは不透明である。「明治の精神に殉死する積」という自殺の契機は、多数の論考の究明にもかかわらず、やはり分ったようではない。「先生」自身が、

私に乃木さん「明治天皇に殉死」の死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方ありません。或は箇人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かも知れません。

と書くのである。「私は私の出来る限り此不可思議な私といふものを、貴方に解らせるやうに、今迄の叙述で己れを

問1 傍線部(a)～(e)の漢字を平仮名に直しなさい。

問2 本文中の空欄 [A] ・ [B] に当てはまる夏目漱石の作品名をそれぞれ答えなさい。

問3 本文中の空欄 [X] に当てはまる言葉を本文中から抜き出して答えなさい。

問4 傍線部(1)について、筆者の指摘を踏まえ、この絵葉書が持つ機能として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 三四郎を迷わせる機能

イ 三四郎を思い込ませる機能

ウ 三四郎の期待を裏切る機能

エ それ以外の特殊な機能

問5 傍線部(2)で使われている修辞技法として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 直喩

イ 隠喩

ウ 擬人法

エ 倒置法

オ 省略法

問6 傍線部(3)とあるが、これは何と何の間で生じる「時差」か、回答欄の形式に合うよう二十字以内で答えなさい。

問7 本文の内容として正しいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 漱石は作中で手紙を多用しており、中でも「おれ」や三四郎の手紙は彼らの心情をきわめて詳細に記述する機能を果たしている。

イ 『三四郎』に登場する美禰子の絵葉書は、漱石自身が書いた絵葉書を基にしたもので、三四郎と美禰子の関係を象徴している。

ウ 「先生」は、青年の「私」に自殺の理由を理解してもらえると信じて遺書を書いたが、その内容は一方的なものだった。

エ 漱石は手紙を通じて、登場人物の内面や関係性を掘り下げ、人と人が理解し合うことの難しさを描いた。

以下余白